127　副腎シンチグラフィの定量評価

兵庫ガンセン　放科
末松　徹
神大　放科　一柳明弘、　大西隆二、　松尾導昌
西山章次、　高橋龍児、　井上善夫

副腎シンチグラフィは副腎の概略の機能と形態を知有力な方法として広く普及している。特に^{131}I -adosterol が使用されてからは診断的価値はいっそう高まっているが、診断の定量評価についていまだ報告が少ない。今回我々は副腎の定量評価を行ったので報告する。

対照は、異常群７例、対照群７例の１４例である。

^{131}I-adosterol ４００ Ci 静注後６日目に背面より preset time ９９９．９secにて撮像、同時に画像を６４×６４のmatrixに収録した。back ground は左右の副腎を含む領域をのぞき決定し、副腎を含む領域で back ground より高いcount を総計して左右の副腎の count とした。

左右の副腎count の対比、back ground との対比等の検討を、症患群、対照群について行ったところ、両者の鑑別に有意な結果が得られた。

128　ピンホール法による副腎シンチグラムのパターン分類

鹿大　放
中條政敬，坂田博道，城野和雄，島袋國定，篠原慎治

演者は昭和５１年の本学会でピンホールコリメータによる副腎シンチグラフィ（ピンホール法）の有用性について報告したが，今回，過去４年間に本法を実施した副腎正常例７０例，原発性アルドステロン症１１例，クッシング症候群７例，副腎性器症候群１例，褐色細胞腫３例の計９２例を対象として，本法による副腎シンチグラムのパターン分類を試み，質的診断について検討したので報告する。　方法は既に報告した如く，高解像の副腎影を得るために，ピンホールコリメータを用い各副腎を背面より撮像するものである。

まず正常左副腎は楕円形，三角形，円形に大別され楕円形は更に頭部が尖形に近いもの，鈍なものおよび長楕円に近い３つのtypeに，また三角形は打点が頭部で高いもの，内側部で高いものに分けられ，楕円形の頻度は３９例（５６％），三角形２０例（２９％）および円形１１例（１５％）であった。正常右副腎は三角形としては正三角形に近いものと二等辺三角形に近いものとがあり，楕円形は長軸方向の異なる二つのtype，その他としては円形，鎌状のものがあり，それぞれの頻度は三角形４４例（６３％），楕円形１８例（２６％），その他８例（１１％）であった。副腎内の打点分布に関しては左は頭・内側が，右は中央部が高いものが多く認められた（左：７１％，右：７７％）。これらの正常副腎影の認識はシンチグラムの判定に際し，重要なものと考えられた。

原発性アルドステロン症のパターンは基本的には正常副腎影内に腺腫が円形の高集積像として描出され，standard scintiで腺腫像が不明瞭なものは１１例中１例のみであったが，正常副腎影との対比により，患側の推定は可能であった。

クッシング症候群では腺腫は高集積像，癌腫は集積(+)or (−)であったが，腺・癌腫共に同・対側の病変部以外の副腎組織は描出されなかった。過形成では両側副腎の正常～腫大像を示したが，腺腫で既に左副腎摘出術を施行し，再度クッシングの症状の出現した１例では右副腎内に高集積像を認めるも，辺縁に向うなだらかな打点の減少が見られ，腺腫との鑑別が可能であった。また過形成による副腎性器症候群では両側副腎の腫大像を呈した。

髄質病変である褐色細胞腫では腫瘍の大きさに応じて，患側副腎の完全欠損，部分欠損像が認められた。

以上の各シンチグラムパターンと下垂体・副腎系のfeed back 機構を考慮することによって，副腎シンチグラムのみでもある程度質的診断が可能であった。

Presented by Medical*Online